

# 山形大学附属博物館（小白川キャンパス）の展覧会（抜粋）



山形大学小白川キャンパス正門



人文社会科学部及び博物館の建物入り口



人文社会科学部及び博物館の玄関



人文社会科学部及び博物館の玄関



博物館の入口



博物館の入口



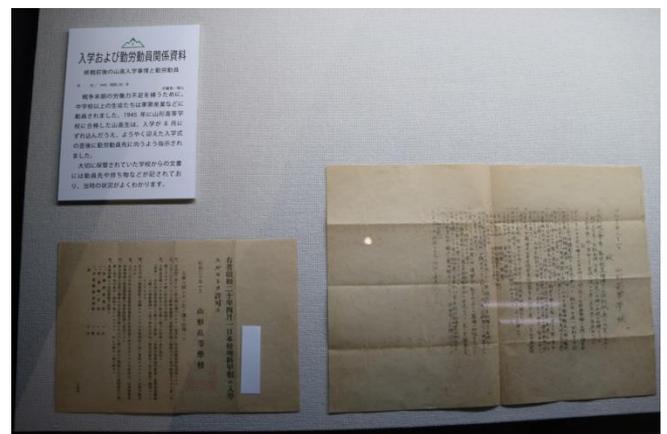
山形大学の歴史関係資料の展示



鈴木光男先生関係資料の展示ケース



鈴木光男先生関係資料の展示ケース



鈴木光男先生関係資料



## 入学および勤労働員関係資料

### 終戦前後の山高入学事情と勤労働員

年 代 / 1945 (昭和 20) 年

所蔵者 / 個人

戦争末期の労働力不足を補うために、中学校以上の生徒たちは軍需産業などに動員されました。1945 年に山形高等学校に合格した山高生は、入学が 8 月にずれ込んだうえ、ようやく迎えた入学式の直後に勤労働員先に向うよう指示されました。

大切に保管されていた学校からの文書には動員先や持ち物などが記されており、当時の状況がよくわかります。



出勤ニ関スル注意

文科一年 出勤先  
理科一年乙類 山形縣東田川郡手向村  
作業 松根乾溜作業(技根、根割、運轉、運搬)  
出勤 八月十一日

理科一年甲類 出勤先  
山形縣西村山郡柴橋村字金谷  
作業 防空、故護、研究施設、緊急構築作業  
出勤 八月十一日

持参スベキ品  
履物(下駄、長靴、草履、作業靴等) 地下足袋、マント、下着類、箸、箱、洗面用具、日用品、行鐘、針、糸、塵紙、物資配給ニ関スル移動証明書、衣料切符、教練教科書参考書、水筒、防空ズキン、飯盒又ハ弁当

服装 脚絆着用 作業ニ適スル服装

夜具布団 布団、寢巻枕等ハ梱包ノ上木札荷札添付  
送先、差支不明記左記宛至急發送シ置クベシ

理科一年乙類 山形縣東田川郡手向村農業會宛  
着取、陸羽西線 狩川駅止扱

理科一年甲類 山形縣西村山郡柴橋村字金谷隣保館宛

出勤に関する注意

證明書

昭和二十年八月十六日

右者本校生徒ニシテ學徒勤勞動員解除ニツキ歸省スル者ナルコトヲ證明ス

山形高等學校長 日野月明 喜

昭和二十年八月十六日

昭和一月一日生



勤勞動員解除に関する証明書

# ふすま

昭和二十一年六月廿六日印刷(非賣品)  
 昭和二十一年七月一日発行  
 編輯者 山形高等學校 末吉  
 發行所 山形市山形町五十四  
 印刷所 山形市山形町五十四  
 印刷所 山形市山形町五十四  
 印刷所 山形市山形町五十四  
 印刷所 山形市山形町五十四

## 矛盾と分身

小松 攝郎

人間は矛盾的存在であると云はれる。周知の如くフロイトの言葉は人間の矛盾を典型的に表してゐる。

己の胸には二つの霊が住んでゐる。その一つが外の一つから離れようとしてゐる。一つは荒々しい愛情の情を以て、章魚の足めいた、掴み附く道具で、下界に掴み附いてゐる。今一つは無理に眼を離れて、高い霊どもの世界に登らうとしてゐる。

このやうな矛盾は程度の差はあるが誰の内にもあるものである。之を「ゴースト」とバトスとの矛盾と云ふことも出来る。併し人間はこの矛盾を如何にかして處理しながら生活してゐるのである。一方から云へば、人間は矛盾を持つが故に活力があり發展することが出来る。これはヘーゲルをまたなくとも明かなことであらう。矛盾を克服することによって人間は進歩し、更に高い段階の矛盾に進むことになる。併しこの矛盾が極端に至り、一身内に包み切れなくなる場合がある。この時人間は分裂し、二重人格即ち分身が

生ずる。例へば「ジョーキル博士とハイド博士」の場合を考へてみるに、ジョーキル博士はゴーストであり、ハイド博士はバトスである。ゴーストとバトスの矛盾し、バトスが抑へ切れず、ゴーストが獨立しようとして飛び出したのがハイド博士である。「フロイト」の場合には、フロイトが二つの霊の矛盾に悩み、バトスの方がメロイストフエレスとなつて現れる。メロイストフエレスはフロイトの分身であらう。又、ニーチェの超人ツァラトゥストラはニーチェ自身の分身である。

人間には矛盾する二つの霊が住むが、その二つを共に満足させることは出来なない。両方満足させれば矛盾でなくなくなるのである。一方を満足させれば、他方は満足しない。此處に充足される願望が生ずる。フロイトは哲學も法學も醫學も神學も底の底まで研究し、メロイストフエレスの究め盡したが、充足されるもう一つの霊がある。之がバトスであり、バトスは充足されることを要求する。この願望がメロイストフエレスとなつて現れる。ジョーキル博士に對するハ

イド氏の關係も同じである。又、ニーチェにとつても超人は願望である。ニーチェは強さと弱さとの矛盾の性格の人であるが、元來は心の繊細なやさしい人である。この事は彼の書翰等から知ることが出来る。彼の自分の弱さに對して強さを求めた。然も一氣に強さを獲得し得ない悩みがあらう。この願望がジョーベンハウエルの意志の哲學を受け入れた。その線を延ばして極點に達し、遂に超人を生むに至つたのである。ニーチェとジョーベンハウエルとは逆の進んだ。性格的にも相反する方向に關係にある。ジョーベンハウエルは意志の強い人であり、自分の要求を強引に押し通す。ニーチェは強さを抑へた。ジョーベンハウエル自身自身の強さを持つて居たと考へられる。彼は自分の強さを否定することを望んだ。これによつてジョーベンハウエルの意志否定の哲學が生じたのである。ニーチェにとつては弱さを否定する強さが、ジョーベンハウエルにとつては強さを否定する弱さが充足される願望であつた。

時迄も分裂のまゝである。併し超人の自殺は自暴自棄の自殺であつてはならず、人のみの問題ではなく、國家のみの問題ではなく、國家の運命も同時に影響を受ける。この矛盾と分身の問題は個々の問題ではなく、國家の運命も同時に影響を受ける。この矛盾と分身の問題は個々の問題ではなく、國家の運命も同時に影響を受ける。

## 發刊の辭

小松 攝郎

周囲のものが益々強く成長する夏がやつて来た。戦に敗れて去つてしまつて、だが別れてしまつたやうに見える日から漸く一年が過ぎて来たやうである。

世の一切が、性格を外より取外されて、雄叫びを擧げて流れ出し入り亂れ、混沌としたまゝ動き続け、争つて廣くなつた世界の明るく空気を呼吸しようとしてゐる。この中から良いものが伸びる日も近いであらう。この混沌の中にはかすかな光が映つてゐる。

かすかな空気が中であつて絶えず真理を追求し、全く生きんと努めて已まらなかつた我々も急速に成長しつゝあり、學問の生活は次第に前進しつゝある。

此の時我々は學校全体としての文化的媒介、紐帶、發表機關が缺けてゐるのを見、これなればと感じたのであつた。從來も種々のものが發刊され、校友會誌、寮報、等々、れんぐに目的を向つて来たのだが、特に「ふすま」は生徒個々の間は勿論、校友會、教授、先輩との間の紐帶ともなつてゆきたい。諸君は此處に自らの姿を現はし討論し批判も合つて高校生として何處まで達し得たかとの一つの表示とされたい。

この矛盾と分身の問題は個々の問題ではなく、國家の運命も同時に影響を受ける。この矛盾と分身の問題は個々の問題ではなく、國家の運命も同時に影響を受ける。

種々の苦心を経て漸く創刊號を出すことになつた。諸君は之を讀まれて或は失望されるかも知れない、編輯に當つたものの微力を恥づるのみであるが、然し只全努力を傾注して來たものであり、今後とも只努力と精進を以て足らざるを補つてゆかんとする熱意を有するものである。

この伸びゆく若き芽は諸君と共にあり、諸君と共に成長するものなることを知つて頂いて今後の大いなる協力を切に切に期待する。

分身の方が本身を克服する。アセンの「ブランド」等を見、矛盾は外に分身を作らうとする。併しこの行き方でも超人的人物は何れも脱落してゐる。フロイトも死ぬ。狂気に陥つた。ドストエフスキの「悪霊」に現れる超人キエリロフは自殺した。

六月十三日

新緑の葉々として輝く明澄な光と成長への衝動とが、再び我々の魂に戻つて來た。この光と躍動との最中に我々の念願して止まなかつた校内誌「ふすま」が、若葉と共に我々の前に躍り出たのである。これが本當に我々の手に依つて創られたものだと思ふと、嗚呼、亦隠し切れぬ喜びが胸にこみ上げて來て止めやうも思へばこの丘に自治燈を灯したのは、去年の秋も暮たつた。始めて丘に登つて荒廢に歸した際立つた時、我々は何を思つた事であらう。誰しもが思つた事は現世に於ける道義の頹廢、知性の貧困、低迷と混亂とより如何にして立ち上るか、明日の新しいもの、強きものの創建ではなかつたらうか。吾人も夢を書き理想を立て、ユートピア創造を幾度も思つた事だ。自治に火を

創刊に寄せて  
 遺藤 拓

新緑の葉々として輝く明澄な光と成長への衝動とが、再び我々の魂に戻つて來た。この光と躍動との最中に我々の念願して止まなかつた校内誌「ふすま」が、若葉と共に我々の前に躍り出たのである。これが本當に我々の手に依つて創られたものだと思ふと、嗚呼、亦隠し切れぬ喜びが胸にこみ上げて來て止めやうも思へばこの丘に自治燈を灯したのは、去年の秋も暮たつた。始めて丘に登つて荒廢に歸した際立つた時、我々は何を思つた事であらう。誰しもが思つた事は現世に於ける道義の頹廢、知性の貧困、低迷と混亂とより如何にして立ち上るか、明日の新しいもの、強きものの創建ではなかつたらうか。吾人も夢を書き理想を立て、ユートピア創造を幾度も思つた事だ。自治に火を

## 新聞「ふすま」

学生による学生のための新聞

発行年 / 1946 (昭和21)年 所載者 / 個人

戦後の混乱が収まらないなか、ドイツ語教員・大畑末吉 (1901~78) が中心となって山高生とともに発行した新聞です。厳しい状況だからこそ、社会の再建のために意欲的に学ぶ若者たちの気概が伝わってきます。



号鐘（山形高等学校の寮で起床と食事の時刻を生徒に知らせるために使われていた。）



火鉢（山形高等学校の寮生が部屋で暖房器具として使用していた。）



一体型机椅子



教育学部の校舎で用いられていた「注意書き」

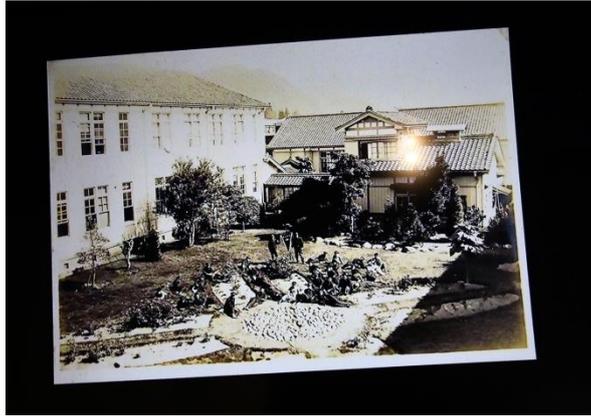
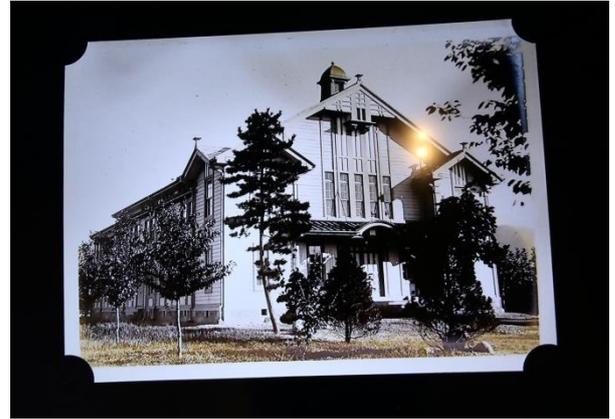


山形大学旧校舎（大正7年に完成した山形高等学校の玄関）  
（作者：長野 亘 氏）



山形高等学校の校旗

昭和 5 年卒業記念アルバムから



教員肖像写真帳（昭和 16 年～19 年）



西澤富則学校長



佐藤直丸教頭



教員団（各教員は博物館でご覧ください。）



花岡謹一郎初代ふすま同窓会長

## 旧山形県師範学校校舎模型



### 旧山形県師範学校校舎模型

本館は今の教育資料館

制作年代 / 1960 (昭和 35) 年

山形県師範学校は 1878 (明治 11) 年山形市旅籠町に開校し、1901 年緑町に移転しました。1949 (昭和 24) 年の山形大学設立後は 1963 年まで教育学部の校舎として使用、1973 年に本館が重要文化財に指定されました。この模型は 1930 年の卒業生が卒業 30 周年を記念して制作したものです。

